

# I 調査結果の概要

# I 調査結果の概要

## 1 樹種別にみた50年生までの育林費

平成8年度における1ha当たりの育林費（林木資本利子を除く。）は、調査対象5樹種（すぎ、ひのき、あかまつ・くろまつ、からまつ、えぞまつ・とどまつ）の全樹種で前回の育林費（平成3年度）を上回った。

以下、主要樹種別についてみると、次のとおりである。

### (1) すぎ

すぎの1ha当たりの育林費は、274万4千円で平成3年度に比べ、19.5%（44万8千円）増加した。これは、主に請負わせ料金が増加したためである。

育林費を構成する費目のうち主なものについてみると、最も高い割合を占める労働費は家族労働及び雇用労働の減少から97万円となり、平成3年度に比べて26.2%（34万4千円）減少した。この結果、労働費の育林費に占める割合は平成3年度に比べて、21.9ポイント低下し35.4%となった。

一方、育林費の3割を占めている請負わせ料金は90万8千円、次いで苗木代は22万円で平成3年度に比べ、それぞれ138.9%（52万8千円）、24.1%（4万3千円）増加した。これは、請負わせ料金は家族労働及び雇用労働の減少に伴う請負わせ作業の増加によるものであり、苗木代は苗木の値上がりによるものである。

### (2) ひのき

ひのきの1ha当たりの育林費は調査対象樹種の中で最も高く、324万2千円で平成3年度に比べ30.3%（75万4千円）増加した。これは、主として請負わせ料金が増加したためである。

育林費の主な費目についてみてみると、労働費は108万8千円で、家族労働及び雇用労働の減少により平成3年度に比べて18.1%（24万円）減少した。

この結果、労働費の育林費に占める割合は平成3年度に比べて19.9ポイント低下し33.5%となった。

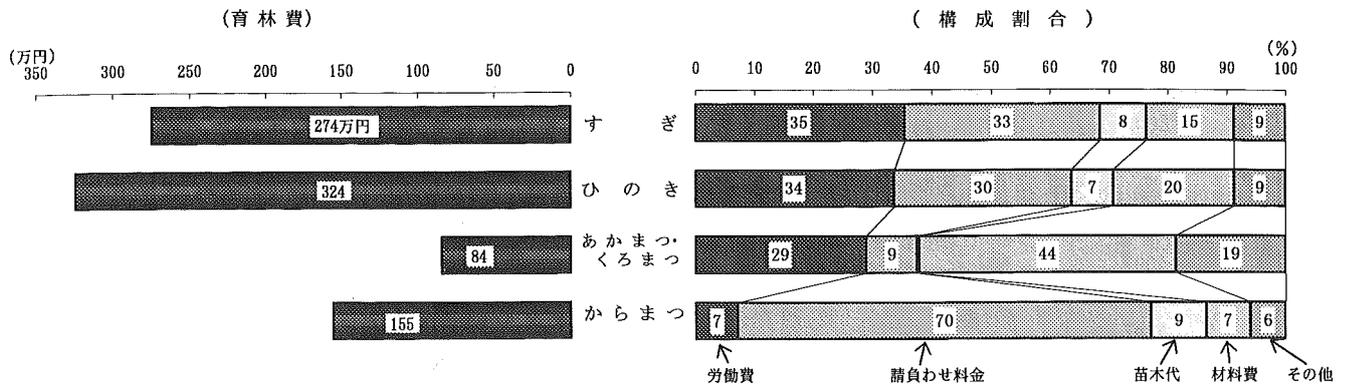
育林費の3割を占めている請負わせ料金は97万円6千円で、すぎの場合と同様の要因により平成3年度に比べて117.7%（51万5千円）と大幅に増加した。苗木代は、23万円で苗木の植林本数の減少から平成3年度に比べて7.6%減少した。

### (3) あかまつ・くろまつ

あかまつ・くろまつの1ha当たりの育林費は84万3千円で平成3年度に比べて26%（17万4千円）増加した。これは、下刈り、枝打ち等の育林作業の増加から労働費が大幅に増加したためである。

育林費の主な費目についてみてみると、請負わせ料金は7万3千円で平成3年度に比べて64.0%（13万円）減少したものの、労働費は24万3千円で平成3年度に比べて262.6%（17万6千円）と大幅に増加した。これは、平成3年に松くい虫による被害が多発したことにより、林家の生産意欲が低下し、育林作業を減少させたことや、すぎ、ひのきへの樹種転換が進められ、育林費が大幅に減少した前回平成3年度の結果との比較によるものである。

図1 50年生までの樹種別育林費と構成割合(1ha当たり)(林木資本利子を除く)



(4) からまつ

からまつの1ha当たりの育林費は、155万2千円で3年度に比べ57.8% (56万8千円) 増加した。これは、主に請負わせ料金が増加したためである。

育林費の主な費目についてみると、育林費の7割を占める請負わせ料金は108万8千円で、次いで労働費は10万9千円、苗木代は14万6千円で平成3年度に比べてそれぞれ58.6%、20.0%、54.1%増加した。

また、苗木代は、植林本数が平成3年度に比べて減少したものの、苗木の単価の値上がりにより増加した。

なお、育林費に占める請負わせ料金の割合が、すぎ、ひのきでは3割台であるのに対し、からまつは7割を占めており、他の調査対象樹種に比べ請負わせ作業の割合が高くなっている。

2 地域別にみた50年生までの育林費(林木資本利子を除く)

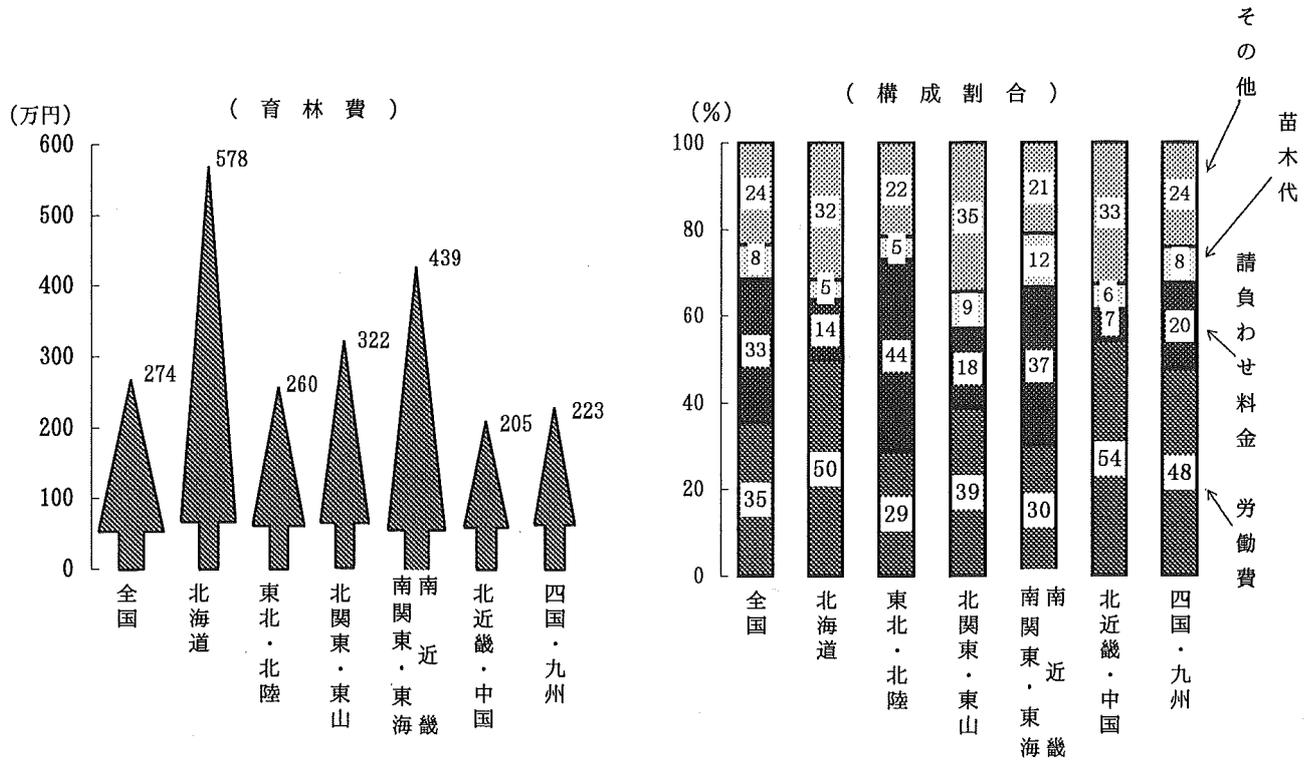
(1) すぎ

すぎの1ha当たりの育林費は、北海道が578万3千円で最も高く、次いで南関東・東海・南近畿が438万8千円、北関東・東山が322万3千円、東北・北陸が260万4千円、四国・九州が223万2千円となっており、北近畿・中国が205万4千円で最も低くなっている。

費目別の構成割合をみると、北近畿・中国、北海道及び四国・九州で労働費の割合が高くなっている。

なお、東北・北陸では請負わせ料金の割合が44.2% (115万1千円) と他の地域に比べ金額、割合共に高くなっている。

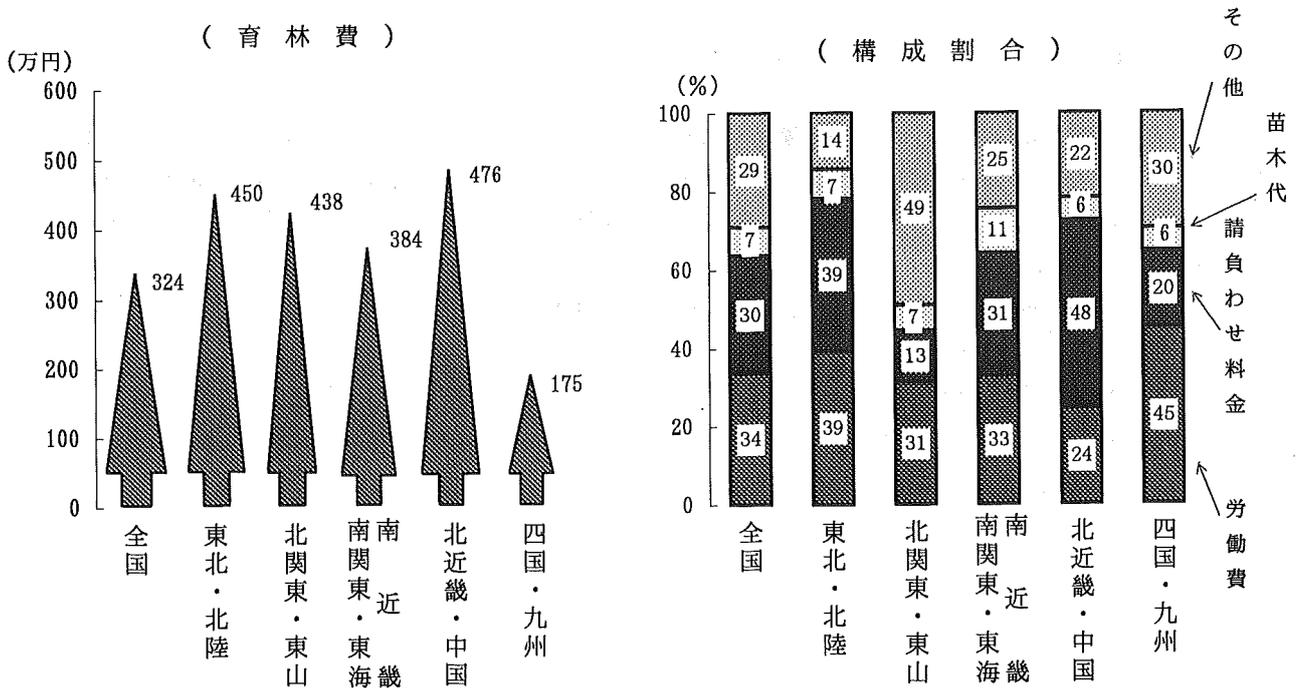
図2 すぎの地域別にみた育林費と構成割合（1 haあたり）  
（林木資本利子を除く）



(2) ひのき

ひのきの1 ha当たりの育林費は、北近畿・中国が475万9千円で最も高く、次いで東北・北陸が449万8千円、北関東・東山が437万7千円、南関東・東海・南近畿が383万6千円となっており、四国・九州が174万9千円で最も低くなっている。

図3 ひのきの地域別にみた育林費と構成割合（1 haあたり）  
（林木資本利子を除く）



(3) あかまつ・くろまつ

あかまつ・くろまつの1ha当たりの育林費は、東北・北陸が112万円で最も高く次いで北関東・東山が76万円、南関東・東海・南近畿が55万3千円、北近畿・中国が22万4千円、北海道が16万7千円となっており、四国・九州が14万7千円で最も低くなっており、地域によりかなりの差がみられる。

(4) からまつ

からまつの1ha当たりの育林費は、北海道が209万2千円で最も高く、東北・北陸が131万2千円、四国・九州が17万2千円、北関東・東山は14万9千円で北海道の約14分の1となっており、あかまつ・くろまつと同様に地域によりかなりの差がみられる。

3 林齢別育林費（林木資本利子を除く）

林齢別の1ha当たりの育林費をみると、すぎ、ひのき及びからまつの3樹種では、造林以降のI 齢級（5年生）の間に多くの費用が投入されており、すぎが133万2千円（総育林費の48.5%）ひのきが162万5千円（同50.1%）、からまつが86万8千円（同55.9%）と総育林費の約5割以上の費用が投入されている。

また、手入期（1～10年生）から保育期（11～30年生）までの間にすぎ、ひのき及びからまつは約8割以上の費用が投入されている。

第1表 樹種別齢級別育林費(1ha当たり)

単位：1,000円

区分		I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX	X	累計
		(1～5年生)	(6～10)	(11～15)	(16～20)	(21～25)	(26～30)	(31～35)	(36～40)	(41～45)	(46～50)	
すぎ	平. 8	1 332	373	238	246	130	108	103	60	56	97	2 744
	平. 3	1 135	399	267	133	75	80	48	46	63	51	2 296
	増減率(%)	17.4	△ 6.5	△10.9	85.0	73.3	35.0	114.6	30.4	△11.1	90.2	19.5
	8年累積構成比(%)	48.5	62.1	70.8	79.8	84.5	88.4	92.2	94.4	96.4	100.0	
ひのき	平. 8	1 625	380	298	245	130	107	101	126	98	131	3 242
	平. 3	1 302	374	241	154	98	88	72	73	42	44	2 488
	増減率(%)	24.8	1.6	23.7	59.1	32.7	21.6	40.3	72.6	133.3	197.7	30.3
	8年累積構成比(%)	50.1	61.8	71.0	78.6	82.6	85.9	89.0	92.9	95.9	100.0	
あかまつ ・ くろまつ	平. 8	4	474	27	29	33	75	59	46	39	57	843
	平. 3	2	259	95	30	150	28	30	14	47	14	669
	増減率(%)	100.0	83.0	△71.6	△ 3.3	△78.0	167.9	96.7	228.6	△17.0	307.1	26.0
	8年累積構成比(%)	0.5	56.7	59.9	63.3	67.3	76.2	83.2	88.6	93.2	100.0	
からまつ	平. 8	868	103	158	8	152	59	45	30	24	105	1 552
	平. 3	544	151	126	34	18	16	13	42	24	17	983
	増減率(%)	59.6	△31.8	25.4	△76.5	744.4	268.8	246.2	△28.6	0.0	517.6	57.9
	8年累積構成比(%)	55.9	62.6	72.7	73.3	83.1	86.9	89.8	91.7	93.2	100.0	

注：四捨五入のため累計値に一致しない場合がある。

#### 4 主要樹種別の労働投下量

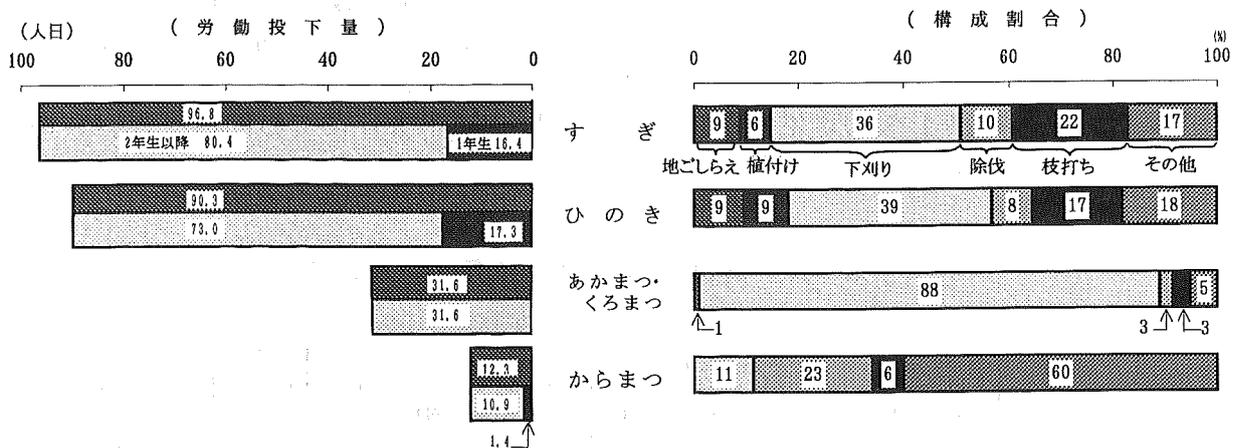
1 ha当たりの労働投下量をみると、1年生ではすぎが16人日、ひのきが17人日と多いのに対し、からまつは植林作業のほとんどを請負わせ作業で行っているため、1人日と少ない。

また、50年生になるまでの1 ha当たりの労働投下量は、すぎが97人日、ひのきは90人日で、平成3年度と比べてそれぞれ38.4%、28.6%減少しており、特に、下刈り、枝打ち作業の減少が目立っている。

これに対し、あかまつ・くろまつは32人日、からまつは12人日で、平成3年度に比べてそれぞれに増加した。

これは、平成3年度に松くい虫の被害により、作業が手控えられ労働投下量が大幅に減少した結果との比較によるものである。

図4 50年生までの樹種別・作業別労働投下量（1 ha当たり）



作業別の労働投下量をみると、すぎ、ひのきは下刈り作業が最も多く、それぞれ35人日（全労働投下量の36%）、35人日（同39%）で、次いで、枝打ち作業、地ごしらえ、植え付け作業の順番となっており、植林後の30年間で、すぎ、ひのきとも労働投下量の8割以上が投下されている。

労働投下量を地域別にみると、すぎでは北海道が216人日と最も多く、次いで、南関東・東海・南近畿が120人日、最も少なかったのは北近畿・中国の80人日となっている。

労働投下量が平成3年度に比べて増加した地域は北海道で、減少した地域は南関東・東海・南近畿、東北・北陸、北近畿・中国及び四国・九州であり、北近畿・中国は平成3年度の約半分になっている。

また、ひのきでは東北・北陸が173人日と最も多く、次いで、北関東・東山が100人日、最も少なかったのは四国・九州の79人日となっている。

平成3年度に比べて増加した地域は東北・北陸で、減少した地域は南関東・東海・南近畿、四国・九州、北関東・東山及び北近畿・中国であり、四国・九州は平成3年度の約半分になっている。

図5 すぎの50年生までの地域別、作業別労働投下量（1ha当たり）

